みんなで作る平和な未来へ

多摩市立愛和小学校　６年　繁浪（しげなみ）　桃花（ももか）

私は令和７年度、多摩市子ども被爆地派遣事業に参加しました。そもそも私が応募したきっかけは、「応募してみたら」という何気ない母の一言でした。それまで広島のことや戦争のこと、原子爆弾が広島に落とされたことは教科書を読んで知っているぐらいで、興味を持ったことがなかった私でしたが、その母の一言に、「応募してみようかな」と深く考えずに返しました。何気ない会話でしたが、今考えるとそう言って本当に良かったと改めて思います。 それは広島で経験した二泊三日の時間は、私の想像を超える事ばかりだったからです。

平和記念資料館では原爆が落とされる前と落とされた後の写真の比較がありましたが、とても同じ場所の写真とは思えないほど変わっていて、ただただ驚きました。一瞬で穏やかな日常が、地獄のような光景に変わってしまうなんてことが起こるということを、リアルに考えさせられました。また当時の衣類や壁、三輪車、被爆者の遺品、被爆した方やご家族のお話はとても言葉に重みがあり、心に響くものがありました。

ANT-Hiroshima では日本だけでなく多くの国々の方たちが参加され、世界平和に向けて活動されています。平和記念資料館でも思ったのですが、海外の方も多く来館されていたことを考えると、平和を願う気持ちに国は関係ないことだと改めて実感しました。また ANT という名前は昆虫のアリからつけられたそうで、一人一人の力はアリのように小さくても、世界各国の人々や NGO と信頼の絆のもと、協力し合うことで大きな平和を実現できるという信念が込められているところが、とても良い名前だと思いました。

被爆者の清水さんのお話では、原爆が落とされた日のことだけではなく、その後も続く苦労や苦しみをたくさん語ってくださいました。死ぬことの辛さ、残された家族の辛さ、生きていく辛さ。原爆はたくさんの人の命を奪うだけでなく、たくさんの人の人生を壊すものであることを知ると同時に、それでも生きるという人の強さを教えていただきました。募金活動 を行い建てられた原爆の子の像はまさに「生き抜こう」「生きて何かを残そう」という人の強さの象徴だと思います。

全体を通して私が印象に残っていることは、原爆の悲惨さや残酷さを、実際にあった物や写真を見ることで、リアルな恐怖を感じられたことと、語っていただいた方たちや爆風を受けても残っている建物、被爆樹木からはこの悲惨で残酷な出来事を忘れてはいけない、二度と起こしてはいけないという思いの強さを感じたことです。

この被爆地派遣を通して、日常が一瞬で壊されてしまうようなことが現実的に起きることを知り、何気ない日常がいかに大切なことなのか知ることが出来ました。平和に向かい私に何が出来るのか、具体的にはまだわかりませんが、結局私一人がやっても何も変わらないなんてことは決して思わず、一人一人が平和を願って行動すれば、大きな平和につながると信じて、毎日小さな平和を一つでも作れるよう頑張りたいです。